

日本語を母語とするひとが、どのようにして エスペランティストになったか

橋 弘 文

1 はじめに

柳田国男、佐々木喜善、宮沢賢治、新渡戸稲造、伊波普猷、比嘉春潮、吉野作造、大杉栄、出口王仁三郎、梅棹忠夫…。かれらはみな国際共通語エスペラントの理想に共鳴し、エスペラントを学び、エスペラントを使うことができたエスペランティストだった。エスペラントは、ロシア領のワルシャワに住んでいたザメンホフが1887年に著作し、出版した『エスペラント博士著国際語』第一書にはじまる。

ザメンホフが考案したエスペラントは、日本では20世紀の初期に広まりはじめる。地方在住の外国人英語教師のマッケンジーとガントレットたちによるエスペラントの普及活動が、日本におけるエスペラントの源流の一つといわれる。日本でエスペラントが広まるようになった、もう一つの源流は、二葉亭四迷のエスペラント入門書『世界語』の刊行にあるといわれている。

エスペラントが日本で広まっていった明治末期から昭和初期は、「大正デモクラシー」の期間に、おおよそかさなる。「大正デモクラシー」期の特色の一つにヨーロッパの思想の流入がある。今井精一は、「第一次大戦のなかで日本の社会が大きく変化し、ヨーロッパ思想がどしどし流入してくるなかから、哲学の流行がうまれてきた」とのべている（今井2006：145）。

山本新は、「欧化」的風潮と「国粹」的風潮とが、ほぼ20年おきに交代しているという近代日本思想史の傾向を指摘している（山本1985：170～181）。日本でエスペラントに関心が高まった明治末から昭和初期にかけての期間は、山本の区分にしたがえば、「第二次欧化期」にあたる。山本によれば、この「第二次欧化期」に西洋崇拜、西洋一辺倒という意味での西洋主義が成立したと

いう。

エスペラントは、「欧化」的風潮のつよい「大正デモクラシー」期に日本で受容されはじめた。しかし、エスペラントに関心を持ち、エスペラントを歓迎したのは、ヨーロッパの思想にあこがれる「西洋かぶれ」の人びとだけではなかった（臼井2009：90）。エスペラントが日本にはじめてもたらされたとき、日本の人びとは、それぞれの関心にもとづいてエスペラントをむかえ入れた。ウルリッヒ・リンスは、20世紀初期の日本における、自由主義者、民族主義者、そしてアカデミズムによるエスペラントの受容についてつぎのようにのべている。

自由主義者たちは西洋の発明のオが生んだ一つのすばらしい成果として、エスペラントを熱烈に迎え入れたし、民族主義者たちはヨーロッパの言語帝国主義とたたかうためにエスペラントを採用したし（北一輝はその『日本改造法案大綱』のなかで、英語教育を廃止し、エスペラントを第二国語に採用するよう主張した）、学問上のコミュニケーションが、もっとやさしくおこなわれることを強く望んでいた医学者たちは、研究やレジュメをよくエスペラントで発表した（ウルリッヒ・リンス1975：98）。

そもそもエスペラントは、世界の人びとがじっさいにそれを使用して、コミュニケーションを成立させるという目的をもつ。エスペラントは、実践的な特色をそなえる理想といえる。人びとは、頭のなかだけで考えるのではなく、エスペラントを学習し、じっさいにそれを使って、異なる言語を母語とする人びとと交流した。エスペラントは、一部の思想家たちだけの思想ではなく、エスペラントの理想にたいして、さまざまな理由から共感

し、エスペラントの理想を実現しようとした人びとの相互的な行動によってささえられていた。

母語や国家語こえるというエスペラントの特色は、世界の労働者の連帯を理想とした社会主義や国家の権力を否定した無政府主義の運動にかさなる部分がある。じっさい、エスペランティストのなかには、社会主義や無政府主義の実現のために活動する人びともみられた。しかし、社会主義や無政府主義とちがいで、エスペラントはあくまで言語であるという特色をもつ。言語の使用の目的は様ではない。異なる言語を母語とする人びととのエスペラントによる交流は、社会主義や無政府主義の理想の実現という目的だけでなく、切手収集や海外旅行での出会いなど、エスペラントによせられるさまざまな関心からおこなわれていた。エスペラントによる異文化交流には多様な目的がみられた。

ところでエスペラントを創作したザメンホフがおかれていた言語状況と、20世紀前半の日本のそれには大きなちがいがみられる。ザメンホフが生まれそだったピヤリストックでは、12から13種の言語がつかわれていたという(伊東 1950: 6)。それらの多様な言語のあいだに政治的、社会的関係から優劣が生じ、そうした言語間の優劣と言語間で十分理解しえないことが、日々の生活に深刻な問題をなげかけていた。

20世紀前半の日本列島には、ピヤリストックのような複雑な言語状況はみられなかった。したがって、日本語を母語とする人びとは、多くの場合、日常生活で体験する言語上の問題からではなく、海外に住む異文化の人びととの交流という目的から、エスペラントに関心をもつようになったと思われる。

この稿では、20世紀前半、日本語を母語とする人びとが、どのようにエスペラントに出会い、そしてエスペラントの世界にはいついっただかについて概観する。

2 日本語の集団からエスペラントへの移行

日本語を母語とする人びとにとって、エスペラントとほかの言語のあいだには大きなちがいがあつた。たとえば、日本に居住し、日本語を母語とするひとが、英語を学習し、自由に使いこなせるようになったとしても、そのひとは、英語文化を構成するメンバーの一人になったとはいえないだろう。たとえ、英語が使用できるひとであっても、生活の大部分を日本語で過ごす場合、そのひとは英語文化に属しているとはいえない。

これにたいして、日本語を母語とするひとが、エスペ

ラントを学習し、自由に使いこなせるようになった場合、そのひとはエスペラントという新しい集団に加入したといえる。エスペラントには国際共通語という基本的な理想があり、エスペランティストは、その理想を共有し、実践するがゆえに、エスペランティストになるということには、たんなるべつな言語の習得以上の意味がふくまれている。

しかしながら、現代の世界にはエスペラントを使う人びとが集まって住むムラやマチ、そして国家は存在しない。いいかえれば、エスペラントは地域共同体を形成する言語にはなっていない。また、エスペラントは自然発生的な言語ではなく、ザメンホフによって人工的につくられた。梅棹忠夫は、だから、19世紀から20世紀のヨーロッパにおいて、エスペラントには文化がないとみなされ、不評をかったという(梅棹 1994: 27)。

エスペラントが文化をもたない人工語であるということは、既存の自然語とのちがいをきわだたせている。ひとは、既存の自然語の使用の世界から、人工語のエスペラントの世界にはいり、エスペランティストになる。ただし、エスペラントの地域共同体は存在しないゆえに、エスペランティストになったあと、エスペランティストは既存の言語を併用することになる。すなわち、ひとは既存の自然言語を使用する段階から、エスペラントと既存の自然言語を併用する段階へ移行する。

これは、いいかえれば、ひとがある社会状態(既存の自然言語の世界)からべつな社会状態(エスペラントと既存の自然言語の併用の世界)への移行することをあらわしている。このような個々のエスペランティストの誕生に共通するありかたは、広い意味で、ファン・ヘネップの「通過儀礼」の視点(ファン・ヘネップ 2012)から考察することができる。

ファン・ヘネップは、ひとがある社会状態からべつな社会状態へ移行するさいには、儀礼もしくは儀礼的な行動がおこなわれ、それらの儀礼的行動は、「既存の社会状態から分離する段階」、「既存の社会状態から新しい社会状態に移行する、どっちつかずの段階」、そして「新しい社会状態に統合する段階」から構成されているという、通過儀礼研究の準拠枠を提示した。

とはいえ、ひとがエスペラントの世界に入るとき、なにかとくべつな儀礼がおこなわれるわけではない。しかし、エスペラントは、自然言語の習得のように、意識されないしかたで学ばれることはない。エスペラントを習得したいという意志をもったひとがエスペラントを学ぶ。

エスペラントと自然言語のバイリンガル状態と、ある自然言語とべつな自然言語のバイリンガル状態とのあいだには質的なちがいがあがる。たとえば、日本語を母語とするひとが、英語を使用できるようになる場合、そのひとは英語の使用によって、社会的、経済的に優位な地位を獲得することができる。これにたいして、エスペラントとのバイリンガルは、なんらそうした地位を得ることにはつながらない。

エスペラントは「国際語」ではなく、「民際語」であるという考えがある (タニ 2003: 15~16)。エスペラントは、国家どうしの関係ではなく、「民」と「民」との関係にかかわる。

現在の世界では、英語が国際語として使用されることが多い。あたりまえのことだが、英語の使用能力は、英語を母語とする人びとのほうが、すぐれている。英語を母語とする人びとは、英語が国際語として使用される場において、有利な立場にたつ。「国際語英語」では、個人個人の言語能力の差が、社会的、経済的ステータスの序列を反映する。しかし、エスペラントにおける「民」と「民」との関係では、語学力の差はステータスの序列につながらない。エスペラントは対等性という特色もっている。ここに、いわゆる「国際語英語」とエスペラントとの決定的なちがいがみられる。

エスペラントは、人間が母語以外の言語を学び使用するという行動にかんして、世界にゆきわたっている価値とは、まったく異なる理想を提供している。エスペランティストは、じぶんじしんのステータスを上昇させるためではなく、異なる言語を母語とする人びととの交流のためにエスペラントを使う。エスペラントは、言語能力による序列をつくりだすことなく、民族や国家をこえることを理想にする。

したがって、ひとがエスペラントを学び、エスペラントの世界の入り口にさしかかるさいには、既存の自然言語を学ぶときにはみられない、新しい風景の地平に立つ。ひとは、エスペラントの世界にはいる前と後では、存在のありかたに大きなちがいがみられる。

エスペラントは地域共同体をもたない。しかし、エスペラントは、エスペランティストによる集団を形成する。エスペランティストによる集団は、たがいにエスペラントを使用し、異文化間コミュニケーションをはかることによって成立している。

日本語を母語とする人びとが、社会的、経済的な成功につながらないエスペラントの世界の入り口に、どのようにして接近したのかをみてゆこう。

3 エスペラントに移行する空間

日本語を母語とする人びとは、どのような空間でエスペラントに出会ったのだろうか。どのような空間がエスペランティストになる入り口となったのだろうか。日本語を母語とする人びとがエスペラントの世界に移行するに至った空間に焦点をあわせて、エスペランティストの誕生を概観してゆこう。

3-1 家空間

家空間に居住する夫婦、親子などの家族との関係のなかでエスペラントに出会い、エスペランティストになる場合がみられる。ガントレット恒子は、夫のガントレットとの出会いにより、エスペランティストになった。

英国ウェールズに生まれたガントレットは、1891 年に来日し、1903 年当時には、岡山第六高等学校の英語教師をしていた。夏休みに、ガントレットは友人のマッケンジーを金沢に訪ねた。宣教師のマッケンジーは金沢第四高等学校で英語を教えていた。ガントレットが金沢に来たとき、たまたま、マッケンジーは、オコンナー (J. C. O'Connor) が編集した、英語読者向けのエスペラントの教科書を読んでいて、ガントレットは、オコンナーの本をマッケンジーからかりて読み、エスペラントの世界にはいつていった (初芝 1998: 16)。

恒子の弟で関西学院の学生だった山田耕作もガントレットと出会い、エスペラントの世界にはいつた。

金沢の阿閉温三は、金沢の第一中学校の教師だった父の影響で、エスペラントに出会う。阿閉温三はエスペラントとの出会いをつぎのように記している。

明治四十一年五月発行の福井エスペラント会の *Latoreo* 誌上に掲載された「北陸エスペラント運動史」によると、日本に組織の出来る三年前の明治三十六年夏休みに、私の父が英語教師をしていた第一中学校で、日本最初のエスペラント語講習会が開かれ、五十余人の県下各校の語学者達を網羅して研究されていました。講師は四校講師マッケンジさんと、その親友のガントレット広島高等師範学校講師で、この二人はヨーロッパから本を取り寄せて、十日か一月でマスターし、十四ヶ国から返信をうけると、すっかり自信をつけて、この金沢の地にいち早くエスペラント語の種をまかれたのであります。

当時十八歳であった私は、父からこの話をきいて大

いに感銘し、大正二年、片町の吉川友吉君と計って、外国切手や絵はがきの交換会、北陸コレスポンデンス・クラブ・HCEを創立しました。またその年の九月、殿町教会のバイブル・クラスで、当時四高生で物珍らしがりやの小松の浅井恵倫君と知り合い、HCE機関誌「ブリター・ペーパー」を出版することになり、十一月に菊二倍判二十ページの創刊を、私の名で発刊しました（阿閉 1973：48）。

同じ金沢のエスペランティストの松田周次も父の影響で、エスペラントの世界にはいつている。人類学者の和崎洋一は、父のエスペランティスト本野精吾の影響でエスペランティストになっている。しかし、こうした家空間におけるエスペラントの出会い、かならずしも多くない。エスペラントは親から子へとかならずしも継承されない。エスペランティストの親は子にエスペラントを強制しない。エスペラントは家空間において家族の成員の意志によって選ばれている。

松田周次の妻、松田久子は、松田周次と結婚するまえ、本屋久子の時代にエスペラントに家空間で出会っている。久子は、つぎのようないきさつを経てエスペラントに出会った¹⁾。

1913年に本屋久子は石川県松任にうまれた。久子の長兄は事業に失敗し、長兄夫婦はブラジルへわたった²⁾。次兄が久子の学費のめんどろをみてくれた。頭山満を信奉する次兄は東京で弁護士をしていた。久子は日本女子大学に進学し、麴町にある次兄の家に下宿した。ある日、久子は大学の友人から、久子が知らない人間の引っ越しの手伝いをたのまれる。引っ越しの手伝いといっても、風呂敷包みを運んでゆくことでした。ところが、しばらくして久子は共産党員の逃亡をたすけたことにより、警察に逮捕されてしまった。

久子は数ヶ月間、麴町警察署の留置所に入れられた。次兄は久子を勸当し、久子は警察から釈放されたあと、上野の耳鼻科で看護助手の仕事につき、その耳鼻科の寮に住む。そのころ隆鼻術が流行しており、久子がつとめるようになった耳鼻科はその隆鼻術で有名な医院だった。

久子が耳鼻科につとめて1年後、二人の警察官が久子の前にあらわれ、久子は逮捕された。久子は元富士署に留置された。

元富士署の署員のなかに、次兄の妻の実家で書生をしていたことがある者がいて、久子を知り、心配した。その署員が、だれか身元を引き受けるくれるひとは

いないかと久子にたずねた。久子は、耳鼻科につとめていたときに知り合った佐々城佑に身元引受人になってもらうように依頼した。そして久子はようやく釈放された。しかし、久子の身体は留置所の劣悪な環境のために重篤な病いをかかえもつことになった。

久子は、警察に釈放されたあと、家庭教師兼お手伝いとして多摩川の佐々城佑家に住み込むことになった。佐々城佑にはルミという小学生の娘がいた。ルミは久子より9才、年下だった。

久子が住み込むことになった家の主人、佐々城佑がエスペランティストだった。佑の妻の松栄もエスペランティストだった。

ルミの夏休みに、ルミにせがまれて久子は富士山にいった。その後しばらくして、久子は留置所がかかった病気が発病したために、故郷の石川へ帰っていった。

久子は松田周次と結婚した後、佐々城佑家におけるエスペラントとの出会いを、つぎのようにふりかえっている。

大正デモクラシーの中で、世界名作少女物語を愛読して育った私は、1934年（昭和9年）正則中学校の英語教師で、新外国語教授法の実践家で、英文タイプやE語教科書を編纂出版されていた。佐々城佑氏からE会話の手ほどきを受けました。^(ママ)

1日2時間、段階的教科書に忠実に従ってタイプに向っていたら、2ヵ月後、キイを見ないで打てるようになり、早速ドイツ人やイストニア人と文通を始めました。送られてきた手紙のE文は、人工国際語故にやさしく、美しく、人間の純粋な理想性、ヒューマンなロマン性を湛えていて、21歳の私は魅了されてしまい、結婚もEの夫をえらびました（松田 1989：9～10）。

Eはエスペラントの略。Eの夫とは松田周次。久子のエスペラントとの出会いは劇的といえる。久子は、大学時代、友人の依頼を引き受けたことがきっかけで、警察に逮捕されたために、次兄から絶縁され、大学を退学し、社会的、経済的に苦境におちいる。それまでのおだやかな日常生活は久子から遠のいていった。久子は、麴町警察署から釈放されたあと、耳鼻科の看護助手としてはたらき、努力をかさね、日常生活をとりもどしかけていたところに、ふたたび警察に逮捕された。久子は再度どん底に落とされる。しかし、そのどん底で、佐々城佑が

久子をたすけ、久子は佐々城佑の家でエスペラントに出会う³⁾。

久子はエスペランティストとの文通で、エスペラントに内在する「人間の純粋な理想性」や「ヒューマンなロマン性」を実感している。おそらく、そうした実感は、同時に、久子じしんが、「人間の純粋な理想性」や「ヒューマンなロマン性」を体現する人間として再生したという認識をあらわしていると思われる。

3-2 学校、職場などにおける友人空間

エスペラントの世界の入り口は家族よりも、むしろ、しばしば友人にみちびかれる。友だち関係が形成される学校や職場が、エスペラントの世界への入り口となっている。

加藤節は、東京商船学校の学生るとき、友人からエスペラントのことをきいて、興味をもち、オコンナーのエスペラントの教科書を取りよせて勉強し、英国エスペラント協会に入会した(初芝 1998: 17)。

石黒修治は、1914 年に英語で文通していたロシア人にエスペラントをすすめられて、エスペラントを学ぶようになったという(坪田 1997: 166)。

旧制の中学校、高等学校、そして大学にはエスペラントのサークルがつくられ、そのサークルとのかかわりでエスペラントをはじめめる学生たちもあらわれた。

1919 年に京都の三高に「三高エスペラント会」が発足し(初芝 1998: 38)、東京の一高に「一高緑星会」が発足している(初芝 1998: 46)。

著名な生物学者の宮地伝三郎は、岡山第六高等学校の「六高エスペラント会」の会員だった(岡 1983: 33)。

同志社中学時代にエスペラントをはじめた西村勇は、同志社高商のエスペラント研究会のメンバーとして活動した(吉川 1996: 14~17)。

甘蔗要は大谷大学在学中にエスペラントの世界にはいり、大谷大学エスペラント会の中心メンバーになった(吉川 1996: 36)。

鳥居篤次郎は、東京盲学校師範科の学生だったときに、盲目のワシーレイ・エロシェンコに出会い、エロシェンコからエスペラントをはじめて学んだ。1914 年にロシアから来日したエロシェンコは、中央気象台の台長でエスペランティストであった中村精男のはからいで、東京盲学校の特別研究生になることができた。エロシェンコは千布利雄の点字版『エスペラント全程』を教科書にして、鳥居をふくむ、60 人ほどの盲学生たちにエスペラントを教えた(高杉 1982: 78~94)。

1947 年ごろ、京都大学の大学院生だった梅棹忠夫は、親友のエスペランティストの和崎洋一からエスペラントを学ぶことをすすめられた。梅棹は、和崎にかりた、エスペラントだけで書かれている教科書を、通学の市電のなかで勉強してエスペラントを習得した。そして梅棹は、大学でエスペラントの仲間をつくり、京大エスペラント会を組織した(梅棹 1994: 52~57)。

エスペラントの世界は、ときおり、仕事上のつきあひからうまれた友人関係によってたちあられる。

岡山市で印刷所研精堂の経営者であった村本達三は、ガントレットの注文する印刷の仕事を引き受けるなかで、ガントレットとしたしくなり、エスペラントにみちびかれていった(岡 1983: 12)。村本達三は、ガントレットが自宅でひらいたエスペラントの講習会の一員となった。1906 年 3 月に村本達三がガントレットの注文により、“A Short Vocabulary/English-Esperanto & Esperanto-English”を印刷した。この単語集は日本で最初のエスペラントの出版物となっている(峰 2011)。

高橋邦太郎は鉄道技師として満州ではたっていたとき、大連満鉄工場の武藤於菟からオコンナーのエスペラントの本をかりて読み、エスペラントの世界にはいっていった(岡 1983: 33~34)。

大石和三郎は、ドイツのポツダム気象台に留学中、エスペランティストのポツダム気象台長にエスペラントの学習をすすめられ、エスペラントを学び、ポツダムのエスペランティストと交流するようになった(初芝 1998: 31)。

柳田国男は、1921 年 7 月から 10 月まで、国際連盟委任統治委員としてジュネーブに滞在していたときにエスペランティストになったと推測されている。国際連盟の情報部ではたっていたエスペランティストの藤沢親雄や、国際連盟の通訳室にいたエスペランティストのエドモン・プリヴァたちとの親交が、柳田をエスペラントの世界に向かわせた要因の一つであると考えられている(岡村民夫 2010: 6)。

佐々木喜善は、1921 年、ジュネーブに滞在していた柳田国男からの手紙で、柳田からエスペラントをすすめられ、エスペラントの世界にはいっていった。エスペランティストとなった佐々木喜善は、岩手の新聞や雑誌にエスペラントの宣伝記事を書き、花巻でエスペラントの講習会をひらいた(峰 2000)。

社会運動にかかわった人びとが、それぞれの社会運動を通じて知り合った友人との出会いのなかでエスペラントの世界にはいってゆく場合もみられた。

坂本鶴子は矯風会岡山支部長として婦人解放運動をおこなっていた。坂本は矯風会のメンバーだったガントレット恒子との交友からエスペラントの世界にはいったと推測されている（岡 1983：16）。

エスペラントは家空間で親から子へ、強制的には伝承されない。また、エスペラントは学校教育のなかでおしえられることもない。たまたま友人のなかにエスペラントやエスペラントに興味をもつ友だちがいたことから、エスペラントの世界にはいるひとが多くみられる。エスペラントは家空間や教育空間をこえた友人空間で伝承されていたといえよう。

3-3 本、雑誌、新聞などを読む個人空間

エスペラントの本やエスペラントについて書かれた記事との出会いが、エスペラントの友人との出会いと同様にエスペラントの世界へのみちびきになることがある。

エスペラントの学習書やエスペラントに関連する本との出会いは、個人的な体験といえる。書店のなかにはほかの客がいるとしても、たいていひとは、ひとりで本をさがし、予想外の本に出会ったりする。書店におけるエスペラントの本との出会いは、出会い現場のそこだけが切り取られたような個人空間のなかで実現する。

雑誌や新聞を読むという行為も個人的な行為といえる。ひとは、ほとんどの場合、ひとりで雑誌や新聞に掲載されているエスペラントの記事を読む。大量に発信されたマスメディアの情報は、それぞれの受け手の個人的空間で受信されている。

黒板勝美は、1902年、東京帝国大学文科大学講師だったとき、長崎海星中学の教師 A. ミスレル (Alfonse Mistler) が英字新聞『Nagasaki Press』に寄稿したエスペラントについての記事を読み、エスペラントに興味をもち、エスペラントを学習しはじめた（初芝 1998：18）。

八木日出雄は、1917年、大阪の北野中学5年生の夏休みに、大阪丸善の書棚にオコンナーのエスペラントの学習書を見つけて、買いもとめ、夏休みにその本でエスペラントを独習した（岡 1983：16）。

宮沢賢治は、『改造』の1922年8月号の「エスペラント語研究」の特集記事を読み、エスペラントの独習をはじめたといわれている（峰 2000）。

岡一太は、1927年に、たまたま書店で叢文閣版の小坂狷二・秋田雨雀共著の『模範エスペラント独習』を見つけ、エスペラントを学習するようになった。岡は秋田

雨雀の解説に興味をひかれた（岡 1983：123）。

1934年、野島安太郎は書店のエスペラント本ではなく、書店のエスペラントの店主と出会い、エスペラントの世界にはいった。野島をエスペラントへみちびいたのは、京都のカニヤ書店の店主、中原脩司だった（野島安太郎 2000：29）。カニヤ書店は京都のエスペラントの拠点の一つになり、中原は1934年から1940年までエスペラントの雑誌“Tempo”を発行しつづけた。

1950年、岡山の国鉄職員だった信木直典は、エスペラントの文通の手紙集である『同じ太陽が世界を照らしている』（栗栖経編、1949年版）を読み、感銘を受け、日本エスペラント学会に連絡をとった。日本エスペラント学会は信木に岡山のエスペラントの岡一太を紹介した（岡 1983：127）。信木は岡と出会い、エスペラントの世界へはいった。

エスペラントにかかわる本や雑誌などを読む空間は、気持ちのうえでの個人的な空間であるが、物理的にも外部と隔離された空間で、エスペラントにかかわる本や雑誌を読む孤独な出会いもある。

月本喜多治は、1906年の秋、京大病院の病室で、二葉亭四迷の『世界語』の広告を朝日新聞でみたことから、エスペラントの世界へはいった（岡 1983：40）。

宮本正男はエスペラントとの出会いを、つぎのように記している。

わたしは1933年12月15日からエスペラントの勉強をはじめた。ザメンホフ祭を期したわけではなく、たまたまこの日に秋田雨雀・小坂狷二共著『模範エスペラント独習』を入手したにすぎない。このとき、わたしは、わたしのいうところの「国立泉州大学予科」の寄宿舎、わかりやすくいうと大阪刑務所北区支所にいた（宮本正男 1993：6）。

エスペラントにかんする本や雑誌との出会いは、ひとがエスペラントになる過程の一段階といえよう。本や雑誌でエスペラントに出会った人びとはエスペラントを学習したのち、エスペラントによる異文化の人びとの交流を経て、ようやくエスペラントになる。

3-4 講習会

エスペラントを習得したいとおもう人びとの多くは、エスペラントの講習会に参加してエスペラントを学ん

だ。講習会に参加したが、エスペラントの世界にはいなかったひともちたことだろう。エスペラントの講習会は、いわばエスペラントの世界への入り口だった。

上代淑は、1905 年にガントレットが自宅ではじめたエスペラントの講習会に参加し、エスペラントの世界には行っていった (岡 1983: 17)。

1907 年 9 月 17 日から 12 月 16 日までの 3 ヶ月間、日本エスペラント協会主催のエスペラント語学校が、東京の本郷の私立習性小学校で開催された。大杉栄がエスペラントをおしえた。約 40 名の参加者のうち、約 10 名が修了した。のちにエスペラントの教科書や辞典をつくった千布利雄も、この講習会の修了生の一人だった (坪田 1997: 98)。

1922 年 8 月 15 日から 2 週間にかけて、「京城エスペラント研究会」のエスペラント講習会がソウルで開催された。講師には日本エスペラント学会外国局員で東京帝国大学の学生だった長谷川理衛が招聘された。受講者は 100 名をこえた。この受講者の一人として、のちに日本と中国のエスペラントの架け橋となった中垣虎児郎が学んでいた (柴田 2010: 17)。

1923 年の春、大本教の教祖、出口王仁三郎のもとに、高見元男という名の京大生の信者から、6 月 1 日から 12 日にかけて、同志社大学の致遠館で、エスペラントの講習会がひらかれる、という内容の新聞記事の切り抜きが送られてきた。王仁三郎は側近の一人にその講習会を受講させ、その受講の報告にもとづいて、大本エスペラント研究会をつくった (出口 1965: 39)。なお、王仁三郎にエスペラント講習会のことを知らせた高見元男は、のちに王仁三郎の娘婿となる。

石川県小松出身の浅井恵倫は、東京帝国大学の学生のあいだ、大学の休みの時期に帰省し、小松や金沢でエスペラントの講習会をひらいた。山代の竹内藤吉も浅井の講習会でエスペラントを学んだといわれている (阿閉 1973: 51)。

米村健や法華暉良は、プロレタリア科学研究所のエスペラント講習会でエスペラントを学んだ (岡 1983: 112, 117)。

多田浩子は、昭和初期にラジオのエスペラント講座をきいて、エスペラントの世界には行っていった (ユネスコ・ペンパルズ編 1955: 46)。

3-5 路上の他者空間

見知らぬひとが行き交う路上で、偶然に、エスペラントに会い、エスペラントの世界にみちびかれる

という奇跡的な場合がある。1915 年の 2 月、失意にあった秋田雨雀は、東京の鬼子母神の森で、偶然に、エスペラントのエロシェンコに出会った (高杉 1982: 101)。雨雀は、かれの生き方を根本的に変えた、この劇的な出会いについて、こう書いている。

ワシーリイ・エロシェンコが私の前に現れたのはこの時であった。エロシェンコは小ロシア、クルースク生れの盲目の青年であったが、熱心なエスペラントであった。私は全く人生に絶望して極端にニヒリスティックになったとき、エロシェンコは盲人でありながら、世界のエスペラント運動のために熱心に働いているのを知った。私はすぐにエスペラントの勉強をはじめた。私は三月ほどで、ほぼこの言葉を会得した。私はこの言葉を知ったおかげで、人生を別な眼で見る事が出来た。そしてたくさんの仕事が私の前に現れて来た (秋田 1953: 50)。

雨雀の「人生を別な眼で見る事ができた」ということばは、エスペラントの世界への移行を的確に表現している。ひとはエスペラントの世界にはいると、それまでとはちがうしかたで世界を見る。エスペラントになるという存在のあり方の変換が、認識の変化を引き起こさせている。

4 出会と対話

20 世紀前半、日本語を母語とする人びとが、どのようにしてエスペラントの世界へは行っていったかについて概観してきた。だれも強制されてエスペラントの世界へは行ってはいない。人びとは、それぞれの自由な意志でエスペラントの世界にふみだしている。そうしたエスペラントへの移行には、人間と人間の出会いが介在している。日本語を母語とする人びとは、さまざまな人間と人間の出会いをとおして、エスペラントの世界へは行っていった。

出会いは、日本におけるエスペラントのはじまりにもみられる。岡山に住んでいたガントレットが金沢のマッケンジーと友だちだったからこそ、ガントレットはマッケンジーを介してエスペラントを知り、岡山を拠点にエスペラントを普及するようになった。

1902 年、二葉亭四迷がウラジオストックに滞在していたとき、エスペラントのポストニコフに出会った。二葉亭四迷が日本に帰国したあと、1903 年 3 月に

ポストニコフは来日し、東京の二葉亭四迷の下宿を訪れ、エスペラントの入門書を日本語に翻訳するように懇願し、50ドルの出版資金を提供した。このポストニコフと二葉亭との出会い、そしてポストニコフの熱意と二葉亭の義理がたさが、1906年に二葉亭四迷の『世界語』を刊行させたといわれている（なだいなだ・小林司 1992: 66~67）。

日本語を母語とする人がエスペラントの世界にはいると、そのひとはエスペラントの共同体のメンバーとなる。共同体の根源的なあり方として、エスペラントの共同体は、エスペランティストとそうではない人びとをわけける。エスペランティストが異文化に住む人びととエスペラントで交流するところに、その境界線がひかれる。エスペラントをとおして異文化の人びとに出会うという理想と行動が、エスペラントの共同体を成り立たせている。

1922年11月に山本鼎が長野県小県郡神川村に設立した「日本農民美術研究所」のスタッフの一人に山代のエスペランティストの竹内藤吉がいた。竹内藤吉は「塗術科囑託」として研究所の活動を支えていた（日本農民美術研究所 1923: 9）。しかし、おそくとも1924年11月までに、竹内は山本と意見が対立し、研究所を辞めさせられている（『農民美術』第一巻第四号 1924: 41）。

1937年12月、竹内は古沢末治郎、多羅尾一郎らとともに「エスペラント報国同盟」を結成する。この団体は、日中戦争にかんする日本の正当性をエスペラントで海外に宣伝することを目的にしていた（初芝 1998: 102）。

いっぽう金沢の松田周次は、日本軍が中国の領土に侵入したから日中戦争がおきたとエスペランティストの友人に電話で話したところ、1938年1月、警察に逮捕され、金沢刑務所にいられる。1939年1月に、金沢裁判所は陸軍刑法違反による「禁固4ヶ月、執行猶予4年」の判決を松田に言いわたした（野島 2000: 162~163）。松田周次の妻の久子が、思想をとりしめる警察に不当に逮捕され、冬の寒い時期に留置所にとめおかれたために、深刻な病気にかかったことはまえにのべた。

戦後、竹内藤吉が松田周次・久子夫妻の家をとときどき訪れた。山代から金沢に来た竹内を、松田夫妻はあたたかくもてなした。竹内が経済的に困っているようにみえたとき、松田夫妻は竹内にじぶんたちの肖像画の製作を依頼し、できあがった肖像画の代金で竹内をたすけたという。

戦時期にはまったく考えと行動のちがっていた竹内

を、戦後になって松田夫妻は、正義をふりかざして非難しなかった。なぜ松田夫妻は竹内を歓待したのだろうか。おそらく松田夫妻のやさしさだろう。竹内をむかえる松田夫妻のやさしさは、エスペラントが「正義の言葉」ではなく「対話の言葉」であらねばならない（タニ 2003: 160）というエスペラントの理想の実践でもあったように思われる。

注

- 1) 2010年9月17日、12月3日、2011年8月17~18日、2012年3月13日におこなった松田久子さんからの聞き書きの一部。
- 2) 松田久子さんは、後年、ブラジルの *fortaleza* で開催されたエスペラントの世界大会に出席したとき、ブラジルにわたった長兄の家族に出会うことができた。
- 3) 松田久子さんのエスペラントとの出会いは、（比嘉 2011: 166~169）にも記されている。

参考文献

- 秋田雨雀（1953）『雨雀自伝』新評論社
 阿閉温三（1973）『牧畜一代記』北国書林
 伊東三郎（1950）『エスペラントの父 ザメンホフ』岩波新書
 今井精一（2006）『日本の歴史 23 大正デモクラシー』中公文庫
 白井裕之（2009）「媒介言語を「創出」する試み—計画言語の社会学」木村護郎クリストフ／渡辺克義編『媒介言語論を学ぶ人のために』世界思想社
 梅棹忠夫（1994）『エスペラント体験』日本エスペラント図書刊行会
 岡一太（1983）『岡山のエスペラント』日本文教出版
 岡村民夫（2010）「ジュネーブの柳田国男—岡村民夫・佐藤竜一『柳田国男・新渡戸稲造・宮沢賢治—エスペラントをめぐる』イーハトヴ・エスペラント会
 柴田巖（2010）『中垣虎児郎—日中エスペランティストの師』リバーロイ社
 高杉一郎（1982）『夜あけ前の歌—盲人詩人エロシエンコの生涯—』岩波書店
 タニヒロユキ（2003）『エスペラントとグローバル化—国際語とは何か—』日本エスペラント図書刊行会
 坪田幸紀（1997）『葉こそおしなべて緑なれ——尽きせぬ興味の問題』リバーロイ社
 出口京太郎（1965）『エスペラント国周遊記』朝日新聞社
 なだいなだ・小林司（1992）『20世紀とは何だったのか マルクス・フロイト・ザメンホフ』朝日新聞社
 日本農民美術研究所（1923）『大正十二年四月 日本農民美術研究所概況』
 『農民美術』第一巻第四号 1924
 野島安太郎（2000）『中原脩司とその時代—エスペラント時事月刊誌“Tempo”を中心として』リバーロイ社

- 初芝武美(1998)『日本エスペラント運動史』日本エスペラント学会
- 比嘉康文(2011)『我が身は炎となりて 佐藤首相に焼身抗議した由比注之進とその時代』新星出版
- ファン・ヘネップ著 綾部恒雄・綾部裕子訳(2012)『通過儀礼』岩波文庫
- 松田久子(1989)「国際協同組合運動にエスペラントも使いましょう!—国際協同組合エスペラント会議(IKEO)の実践的報告—」『生活協同組合研究』vol 161
- 峰芳隆(2000)「宮沢賢治におけるエスペラント」『国文学 解釈と鑑賞 特集 宮沢賢治 謎の世界』至文堂
- 峰芳隆(2011)「105年目の里帰り—村本達三の絵葉書」『La Movado』N-ro 722
- 宮本正男(1993)『宮本正男作品集2』日本エスペラント図書刊行会
- 山本新(1985)『周辺文明論 欧化と土着』刀水書房
- ユネスコ・ペンパルズ編(1955)『地球の片隅で—手紙に託した生活の断章—』朝日新聞社
- 吉川獎一編(1996)『中3人おかれた人—西村勇』リベロイ社
- ウルリッヒ・リンス著 栗栖経訳(1975)『危険な言語—迫害のなかのエスペラント—』岩波新書